

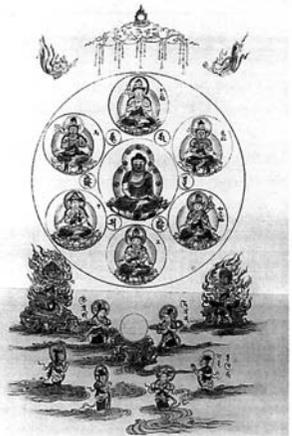
【研究ノート】

「六字経曼荼羅」の成立について

六字経曼荼羅(図1)は、六字経法という密教修法の本尊に用いられました。この修法は十世紀には既に行われていたことが記録から窺え、呪詛への対抗、病気平癒や安産祈願を目的として宮中で盛んに行われました。当館の他、醍醐寺、奈良及び京都国立博物館に所蔵される鎌倉から室町期の遺例が知られます。図1は、仁和寺の恵什が編纂した密教図像集である『図像抄』(12世紀前半成立)に収められた曼荼羅です。一般に流布していた形式と考えられます。図様を確認すると、中央に釈迦金輪をおき、その真下には聖観音が描かれ、千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪の各観音が時計回りに配されます。下部には左右に大威徳・不動の二明王が岩座に坐し、間には月輪、それを囲む六体の呪詛神、最上部には、天蓋と二体の飛天が描かれます。ところで、中央六体の観音に注目すると、一面二臂を中心とする像容であり、特殊な図像であることが分かります。本稿では、この特異な図像を用いた六字経曼荼羅の成立について、考えたいと思います。

修法に際して用いた曼荼羅について手掛かりを与えてくれる史料が、真言僧元海(1094~1156)が記した

図1 六字経曼荼羅(『図像抄』所収)



密教の修法次第である『厚造紙』です。これによれば、六字経法の本尊について「観宿僧都、明仙僧都有両伝。中台金輪廻六観音画曼荼羅。明仙本(略)下画不動大威徳。観宿本。」とあり、二種類の曼荼羅が用いられたことが分かります。同時代の『諸尊要抄』や『秘蔵金宝抄』などには、それぞれ図が示されています(図2・3)。観宿(844~928)は醍醐寺を開いた聖宝(832~909)の弟子であり、明仙(10世紀頃)は智証大師円珍(814~891)の孫弟子にあたります。従って、十世紀には図2のような種子曼荼羅と、それに不動・大威徳の両明王を加えた図像が知られていたのです。ところが、中央六観音の配置に着目すると両者は異なり、さらには最初に挙げた曼荼羅とも異なっています。

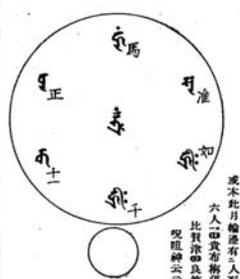
再び『厚造紙』を見ると、既述の箇所に続いて「此曼荼羅之下不動大威徳之中間画小月輪。其廻六体天形合掌画之。(略)是小野僧正所図加給也。」とあり、二明王の下に描かれた月輪と六体の天部形像は小野僧正、すなわち仁海(951~1046)が加えたことが分かります。

仁海が生きた十世紀中頃から十一世紀前半にかけて、六観音信仰が貴族社会に急速に浸透していったことが記録から窺えます(『本朝文粹』)。これらは当時、貴族達が抱いた欣求浄土・六道輪廻抜苦という切実な欲求を反映したものと云えます。

図2 観宿本(『諸尊要抄』所収)



図3 明仙本(『諸尊要抄』所収)



この六観音への信仰は、天台大師智顛が著した『摩訶止観』に由来します。すなわち、大慈・大悲・師子無畏・大光普照・天人丈夫・大梵深遠の六観音を、六道の煩惱を破る尊格としてそれぞれに配するのです。そして仁海は、この『摩訶止観』の六観音は、密教における観音が変化したものであると解釈し、鼓吹しました。俗に「仁海注進文」と呼ばれる史料が、良祐の『三昧流口伝集』(11世紀後半成立)に収録されています。そこには、彼の解釈が次のように記されます。少し長いですが引用します。

「大慈観音者正観変也。救地獄道。(略)左手取青蓮華。(略)右手施無畏也。大悲観音者千手変也。救餓鬼道。(略)六面。左手取紅蓮花。右手施無畏也。師子無畏観音者馬双変也。救畜生道。(略)右手取蓮華。蓮花上有梵篋。左手施無畏也。大光普照観音者十一面変也。救阿修羅道。(略)右手取紅蓮花。花上有瓶。自瓶口出独古杵。左無畏也。天人丈夫観音者准提仏母変也。救人道。(略)右手取青蓮花。左手施無畏也。大梵深音観音者如意輪変也。救天道。(略)左手紅蓮花。花上立三古杵。右手施無畏。」

注目したいのは、観音の順序とその姿です(波線)。図1の六観音と完全に一致します。つまり、六字経曼荼羅は観宿や明仙らの種子曼荼羅をもとに、仁海が貴顕達の間で流行していた天台六観音信仰を組み込んで成立したものといえます。また、仁海が加えた月輪は、観音の三昧耶形である明鏡と解釈され(『遍口鈔』)、

貴族達に支持される図像構成であったとも言えるでしょう。以後、真言の広沢流と醍醐流において、この図像は継承されていきました。

最後に、当館所蔵の曼荼羅(図4)について見ていきます。画面中央、定印を結んで輪宝を載せる釈迦金輪をはじめ、画面上部の飛天や下部に描かれる、合掌する六体の天部形に至るまで、図像は仁海創案の曼荼羅と一致します。ただし、釈迦金輪の左下に配される千手観音のみ、面数が七面描かれます(図5)。これは他に類例を見ず、写し崩れと思われるかもしれませんが、金泥を多用した彩色はよく残存しており、遺例の少ない同曼荼羅の内の貴重な作例であることは間違いありません。なお、本図が制作されたと考えられる室町時代前期、足利將軍家周辺では六字経法は盛んに行われ、調伏や安産祈願のみならず、鎮靈など目的も多岐にわたっていました(『満濟准后日記』、中村禎里「六字経法とキツネ」『大崎学報』156、2000年)。本図の制作には、こうした支配階層が関与した可能性も十分に考えられます。

(学芸部部員 古川攝一)

図1は『図像抄』巻第三「六字経法」(『大正新修大蔵経図像部』三卷)、図2・3は、『諸尊要抄』巻第四「六字経法」(『大正新修大蔵経』七十八卷)より複製致しました。

図4 六字経曼荼羅(大和文華館)



図5 六字経曼荼羅(大和文華館)部分

